

天と地と姫と 織田信奈の野望外伝

春日みかけ

第六話 諏訪平定（前）

「次郎ちゃん。金脈探しの旅、お疲れさま。温泉に入りましょう」

「はい、姉上。姉上の見込み通り、黒川金山以外にもまだまだ甲斐には多くの金脈が眠っています。これらの金脈を武田家直轄金山たけだとすれば、収入は増えますね！」

「次郎ちゃん。やったね。たくさんお米が買えるよ！」

「ところで姉上、太郎と孫六は？」

「太郎ちゃんたちは、駿河の父上のところに遊びに行っているの」

「父上も機嫌を直してくれればいいのだけれど」

「父上は相変わらずお元気のようによ。駿河で新しい奥方と再婚したというわ」

「ええ？ 甲斐にわたしたちの母上を置いたまま、これ幸いと駿河で若い女を……父上も、転んでもただでは起きないお方ね。心配するだけ無駄だったのかしら」

「むしろ父上が駿河で余計なことをして厄介ごとになるんじゃないかと心配だわ。今後も、駿河いまがわ今川家とは友好関係を保ち続けなければならないのだもの」

甲斐、躑躅ヶ崎館。つつしがさきやかた

父・信虎のぶとらを駿河に追放した若き姫武将・武田晴信はるのぶは、金脈回りを終えて帰ってきた妹の次郎のぶしげ信繁と二人きりで甲斐・信濃の地図を広げ、じっとその

地形を睨んでいた。

晴信と信繁は、暴悪な梟雄・信虎には似ても似つかない、美しい姉妹だった。いずれも、美人の誉れ高い母親の大井夫人に似たのだ。

晴信は甲斐守護職をクーデターによって手に入れてから、寝食を惜しんで働き続けていた。晴信の目標は、父・信虎がついになしえなかった大業、信濃奪取である。信虎は勇将だったが、乱れに乱れた甲斐一国を統一して存続の危機にあった武田を「甲斐の王」の地位に押し上げて家運を盛り返すところまでが限界だった。信虎は信濃侵略をあきらめ、信濃の名家・諏訪家と婚姻同盟を結んだのだ。

晴信は、信虎に代わるからには信濃平定を成し遂げるという覚悟で家督を奪った。信濃を取れなければ、父・信虎を追い出したのがただの悪行に終わってしまう。信濃を取ってこそ、父・信虎にも認められる――。

その晴信の思いに、まるで双子のように姉の影として付き従ってきた妹・次郎信繁も、応えようとしていた。

「問題と言えば……次郎ちゃんが金脈探しの旅をしているうちに、信濃の諏訪頼重が武田家に無断で関東管領上杉家と和睦し、佐久の領地を上杉に割譲してしまったわ。このままでは佐久に確保している武田領も、関東管領に奪われてしまう」

「諏訪頼重が？ 禰々の娘婿なのに、武田家を裏切るような真似を？」

「以前、諏訪頼重は禰々との祝言にかこつけてあたしを暗殺しようとして失敗した。そのあたしが武田家の家督を奪ったので、慌てて旧敵の関東管領と手を結んだんだわ」

「それでは姉上。いよいよ諏訪を攻め取り、信濃平定戦を開始するのね」

「諏訪に嫁いだ禰々の気持ちを思うと、気が重いんだけど。先に武田家を裏切ったのは諏訪だし――それに信濃は南北に広く、高い山に覆われた厄介な国。北方の佐久から進出する道は険しい。どうしても、中央に位置する諏訪を武田領とする必要があるわ」

「でも姉上。武田家には、一門を守る、決して殺さないという掟が。裏切り

者は許さないという掟もあるけれど、すでに諏訪頼重はわたしたちの妹・禰々の夫よ。殺すことは武田家の掟に反する」

「ええ。諏訪頼重を殺しはしないわ。ただ、諏訪家の武装解除は必ず行わせる。武家を捨てさせて、諏訪神社の神官に戻らせるの。それで頼重を殺さずに済む」

「……諏訪頼重が肯^{がえ}んじるはずがない話だわ。合戦で雌雄を決して承知させるしかないでしょうね、姉上」

「ええ。対諏訪戦の戦略は、すでに山本勘助^{やまもとかんすけ}が練っている」

禰々にそれとなく離縁話を持ちかけてみたけれど、だめだったの、と晴信はため息をついた。

「信濃は本来、一国として成立しえないほどに広い山国。峻^{しゅんけん}険な山と山の狭間にそれぞれの荘があり町がある。小^{ちいさがた}県。佐久。諏訪。伊那。木曾——それぞれの地域に国人が割拠し、それぞれが独立している。信濃守護の小笠原家でさえ、群雄の一人にすぎない。信濃平定への道は遠いわね」

「中でも諏訪家は信濃随一の名門で、神聖な血を引く神^{みわし}氏。恐れを知らない父上ですらその諏訪家を滅ぼすことはできなかった。姉上が武家としての諏訪家を滅ぼせば、きっと信濃は変わるわ。治世術に長けた姉上が信濃を統一すれば、必ずや信濃は発展する」

晴信の興味と才能は、実は合戦ではなく、内政にあった。

信虎は戦に次ぐ戦で国力を疲弊させ、甲斐の民は皆飢えていた。だから、晴信は甲斐を富ませることに心血を注いだ。家督を継ぐや否や、晴信は甲斐の領民たちを悩ませる暴れ河・釜無川^{かまなしがわ}に対抗するべく、治水事業に取りかかったのだ。

これは十年、いや二十年かかるともわからない途方もない大事業で、家臣団は当然ながら「予算がありません」と反対したが、晴信は「金山開発によって収入を増やすことで対処するわ」とどうにか押し切った。家督を継ぐ以前から、晴信は各地を見聞し、甲斐にはまだまだ金脈が隠れていることを知っていた。

ただ晴信は、信虎時代とは打って変わって軍議における家臣団の発言権が強まっていることに驚いていた。板垣信方いたがきのぶかた、甘利虎泰あまり とらやすをはじめとする四天王のみならず、多くの家臣が「われわれが信虎さまを廃して晴信さまを擁立したのだ、甲斐の政まつりごとはわれわれの合議で決める」と信虎時代に長らく抑圧されてきた自立心を蘇らせて煮えたぎっている。壮大な治水計画は、宿将筆頭の板垣信方が承知していなければ通らなかつたろう。

今はまだ板垣信方、甘利虎泰の両雄が晴信の改革を支持しているから甲斐は成り立っている。しかしいずれ、この両雄ですら理解できない新たな改革に晴信は手を付けねばならなくなるだろう。「神の血を引く諏訪家を滅ぼし軍権を取り上げ、ただの神官にしてしまう」という晴信の神仏をも恐れぬ野望を、迷信深い老将たちがはたして認めるかどうか。

「あたしは、反動が怖い。次郎ちゃん。父上だけじゃない。世の仕組みを新しく改めようとすれば、必ず、旧勢力から憎まれ反発されるわ」

「その時のためにわたしたちがいるのよ、姉上。だいじょうぶ。姉上には、なにがあっても絶対に姉上を裏切らない家族がいることを忘れないで」

「ありがとうございます。次郎ちゃん。えへ。温泉に行きましょう」

「家臣団の前で、次郎ちゃんとか、えへ、は禁止よ。姉上。示しがつかないもの」

「わかってるわよう」

「姉上も武田家の頭領、甲斐の守護になったのだから。これからはもっと威厳を出さないといけないわよ」

「わかっているってば」

お気に入りの温泉へ向かう道すがら、信繁とじゃれ合いながら――

せめて禰々が諏訪頼重の赤ちゃんを懐妊する前に諏訪を併呑へいどんしなければならない、と晴信は思い定めていた。

子をなしてしまってからでは、武家としての諏訪家を滅ぼされた際に受けるであろう禰々の心の傷は癒やせなくなる、とわかっていたからだ。

（あたしはこの乱世のもとで武田家と家臣団、領民を守るために父上を追放

した。それなのに今、こうしてかわいい妹・禰々の夫を倒そうと画策している。矛盾だわ)

そんな晴信の手を、信繁がそっと握りしめていた。

「なにがあっても、わたしは姉上を裏切らない。姉上が禰々のために心の中で泣いていることは、わたしが知っているから」

晴信は幼い頃から、ずっと父・信虎に憎まれ、疎んじられてきた。

そんな晴信を守ってきてくれたのは、いつだって、次郎信繁だった。信虎に「次郎こそ世継ぎに^{ふさわ}相応しい」といつもえこひいきされながらも、信繁は決して姉を侮ったり姉を嫌ったりしなかった。ずっと、晴信を信虎の言葉の暴力から守る「盾」として姉をかばい続けてきてくれた。その信虎を追放する際にさえ。

「次郎ちゃんは、どうしてあたしにそんなに優しくしてくれるの」

「深い理由はないわ。だって姉上は、わたしの姉上なのだから。しいて言えば、姉上がわたしにずっと優しくしてくれたから、かしら」

言われてみれば晴信もまた、一方的に父にひいきされている信繁を憎んだり恨んだりしたことがなかった。

だがそれは、信繁が自分をいつもかばってくれたからだ、と晴信は思っていた。

「いったい、どちらが先なのかしら」

「どちらも先なんじゃないの？　しいていえば、先に生まれた姉上のほうが先だと思うけれど」

二人は、生まれた年こそ違えど、双子のような存在だった。

あたしには過ぎた妹ね、と晴信は思った。

隻眼軍師・山本勘助が晴信のもとに現れたのは、父・信虎の監視の目から解放された晴信が久しぶりに信繁と姉妹水入らずで温泉を満喫した翌日の午後だった。

父・信虎の受け入れ先となった駿河の今川家との関係は、晴信が甲斐守護

職に就いてからも安定していた。今川家には晴信の妹・定が義妹として暮らしており、今は甲斐を追われた父・信虎も事実上の人質として住み着いている。今川家には大きな借りを作ったことになるが、逆に考えれば今川が突然武田と手切れに及んで甲斐へ攻め入ってくる心配もなかった。

しかし、その定は体調を崩して寝込むことが多くなっている。

晴信とすれば、今川との同盟関係が安定している今のうちに、諏訪に進出したかった。切れ者の諏訪頼重は、晴信が家督を継いですぐに旧敵の関東管領上杉家と和している。いずれ信濃に上杉軍を引き入れるつもりだろう。

「御屋形さま。勘助めにござりまする」

勘助が片足を引きずりながら、庭先に伏して晴信に挨拶をした。

「勘助。一ヶ月ぶりかしら。少し痩せたわね、苦勞をかけるわ」

「いえ。これしきのこと、御屋形さまの苦勞に比べればなんでもありません」

「高遠での調略は成功した？」

「はっ」

すでに壮年から初老の年頃にさしかかった山本勘助は隻眼の上に片足が悪く、身体も小柄で、まさに悪鬼の如き異形の男だった。この面相と、戦に勝つためならなにをしても許されると信じて疑わない傲慢さ、人を人とも思わぬ悪謀に満ちた切れすぎる頭脳のために、長年にわたり仕官先すら見つけられなかった異端の軍師だった。

しかし父・信虎に虐げられ続け否定され続けた晴信にとって、切れ者すぎる故にこの世に居場所のない勘助は自らの同志とも言える存在だった——年齢性別を超えて、二人は奇妙なまでに馬が合った。晴信にとっては勘助は妹の次郎を除いてはじめて自分を認めてくれた武士であり、勘助にとっては晴信こそ自分の才をこの世で最初に評価してくれた主君だった。

勘助が、どういうわけか年頃の乙女に男としての興味を抱かない妙な性質だったことも、幸いしたかもしれない。

「すでに諏訪頼重は関東管領上杉家と同盟を結び、甲斐を挟み撃ちにしよう

と画策しております。信虎さまとともに奪い取った佐久の領土を上杉に割譲したのは、その同盟の第一歩でありましょう」

「幸い、上杉家は小田原ほうじょうの北条家と交戦中で、信濃へ出兵する余裕はなさそうね。でもいずれは」

「いずれ諏訪頼重は関東の上杉家、筑摩の小笠原家、小県の村上家むらかみを巻き込んだ武田包囲網を敷きましょう。そこでわれらが先んじるのです」

晴信は戦に疲弊した甲斐の領民を安んじるために内政に力を入れている。今の武田家にはまだ、大軍を動かす余裕はない。そこで山本勘助と晴信が共同して練った策は、「調略」だった。

「諏訪の南、伊那には諏訪家の庶流である高遠頼継たかとうよりつぐという国人がおります。この高遠頼継にはかねてより諏訪頼重を追い落として自ら諏訪家の当主になりたいという野心これあり」

「そこで高遠に『武田と高遠がともに諏訪を討ち、諏訪の領土は両家が分割支配し、高遠頼継が諏訪本家となる』と裏切りを持ちかけて、高遠と武田が南と東から同時に諏訪を奇襲。成功すれば、ほとんど戦うことなく諏訪を平定できるけれど。問題は、諏訪家に嫁いだ禰々の安否よ」

「御意。御屋形さまの妹ぎみをお守りするべく、手を尽くします。諏訪方にはすでに、猿飛さるとびさ すけ佐助を送り込んでおります」

「佐助の猿飛の術は、いまだにからくりの仕組みがわからないわね。どうやって宙を舞っているのかしら。瞬きひとつする間に移動していたり……」

「佐助の術にはからくりなどございませぬ。真田忍群の者どもは幼き頃、戸隠とくしの山を彷徨って異形の力を身につけた者ども。御屋形さまのお父上は真田が抱える忍びどもの異形ぶりを恐れて真田一党を信濃から追い出しましたが、真田はなんとしてもお味方につけねばなりません。それがしの軍略を縦横に実行するには、異形の忍びたちの力が必要です」

晴信はうなずいた。父・信虎が排除した者はすべて、武田家の家臣として抱え込むつもりだった。信虎の怒りを買って追放されたかつての家臣たちも、続々と晴信のもとに戻りはじめている。信虎は血を引いた一門だけを偏愛し、

家臣領民を奴隸のように扱ったが、晴信はその逆をやるつもりだ。家臣も領民も武田一門として扱う、ということである。

だが、その大望を実行することに、重荷を感じはじめてもいた。

諏訪平定は、諏訪頼重に嫁いだ襦々の心を傷つけることになるだろう。

「勘助。高遠頼継の返事は？」

「乗ってきました。諏訪と武田が婚姻同盟を結んだ時点でいちど完全にあきらめていた野望ですからな。今その野望の炎に再び灯がともったのです。この機会を逃せば二度と諏訪本家の座は掴めない。人間の心とはそういうものです」

「あたしが、神氏である諏訪家から軍権を取り上げて神官に戻してしまおうと考えていることは、高遠には知られていないのね」

「御意。高遠は、諏訪頼重のような切れ者ではありません。諏訪頼重を降伏させてしまえば、高遠はいかようにも扱えます」

晴信は、諏訪頼重に一步先んじた。諏訪頼重の命運はここに尽きたと言ってよかった。

勘助、と晴信は苦しげな声を漏らした。

「あたしは武田家を守るはずが、家督を継いで早々に大切な妹を不幸にしようとしているわ。ほんとうに、これ以外に諏訪を奪う方法はないのかしら。諏訪頼重を一門衆として抱え、忠誠を誓わせる方法はないのかしら」

「あいや。諏訪頼重が関東管領と通じた時点で、その道は絶えております。神氏と関東管領は、いずれも御屋形さまが乗り越えねばならない古き権威。武田家に新しい星が現れ古き秩序を新しき秩序に塗り替えようと動きはじめた今、古き両者が手を組むのは必定。対決は避けられませぬ」

「……襦々の気持ちを思えば……あの子はほんとうに優しくて純真な子なの。きっとあたしを憎むわ」

「そもそも襦々さまを諏訪家へ嫁がせたのは、信虎さまの失策にございます。御屋形さまは信虎さまの失策のすべてを補われるために甲斐の当主になられたのです。迷われてはなりません。迷えば、心が痛みます。心が痛めば、身

体を損ねまする」

勘助は、「乱世の当主たる者は自ら悩んではなりません。心身の健康を保ち、一日でも長く生きることこそが有能な当主の使命。妹婿を滅ぼすという悪名は、それがし山本勘助が一手に引き受けまする」と胸を張った。

「すべては勘助が吹き込んでお優しい御屋形さまをそそのかしたまでのこと。軍師とは、このような時のために主のおそばにお仕えしているのです」

「それでも、あたし自身の心が、どんどん黒く濁っていくかのように。いずれあたしも、父上のような悪逆非道の暴君になってしまうのではないかと思うと、自分が恐ろしいの。自分自身の、野心が。いつか、家臣団も一門もあたしから心が離れてしまうのではないかと。老臣の板垣も甘利も、あたしがいきなり諏訪を騙し討ちして併呑することに躊躇ちゆうちよしている……実父を追放し、返す刀で妹婿を討とうとするあたしを、恐れはじめています」

御屋形さまはお優しい。信虎さまが常に心配なされ、叱責し否定なされていたのも、そのお優しさでありましょう、と勘助は目を細めた。

「もしも御屋形さまのお心がもはや耐えられぬというところまで来た時には、この勘助にすべての罪をかぶせ、遠慮なく成敗なさりませ」

「勘助」

「そのための軍師です。御屋形さまは、いかような謀略、調略、悪逆を犯そうとも、古今無双の名君であらねばなりません。ひとたび自らの父親を追放したからには、御屋形さまはなんとしても日ノ本の歴史に英雄として永遠に語り継がれるような名将に成長せねばなりません。その夢を果たす途上で、心を黒く汚してはなりません。この矛盾を解決するために、軍師という影の存在がいるのです。それがし、宿曜道すくようどうの秘法にて天文を見、諏訪頼重の天運を占ってみましたが、諏訪の武運はもはや尽きております」

「勘助は、宿曜道で将星を見ることができるとのね。あたしの将星は、輝いている？」

「いえ。畏れ多くて、御屋形さまの将星を占うなどできません。いずれ、この勘助の知謀と軍略をもってしても対処できぬ難問を前にした時、その禁を

破ることになるやもしれませぬが」

「でも少しだけ知りたいわ。あたしの星はどれ？」

「羅ゴウの星にござります。この星は人間の目には見えませぬ。日輪や月を消す暗黒の星にござります」

「まるで素戔嗚尊すさのおのみことみたい。不吉な星ね」

「いえ。天竺においては忌まわしい星ではありますが、日ノ本におきましては利剣を振るって悪を断ちきり、衆生を救済する不動明王の星にござります。不動明王は悪鬼の如き恐ろしき表情の内側に、人々に対する広大な慈悲の心を宿しているのです——羅ゴウの星が時折日輪を隠すのも、日輪の光を奪い取るためではなく、日輪を蘇らせ再生するためなのです」

「悲しい星ね。いくら慈悲の心を抱いていても、日輪を隠す悪鬼では誰からも誤解されてしまうわ」

「外見の恐ろしさに囚われれず、そのまことの心根を見通してくれる者も、おります。生きてさえいれば、信念を貫き通されれば、いずれは巡り会えましょう。ただし、人の心のまことは、その人の生涯が終わる時にはじめて完結するのです。道半ばで死んでしまっはなりません」

「……いつか、あたしの将星を、天運を勘助に占ってもらう時が来るのかしら」

これ以上迷っているのはこれほどの覚悟をしてくれている勘助に申し訳ない、と晴信はうなずいていた。

「わかったわ。諏訪へ出兵するわ。諏訪を平定し、諏訪家から軍権を奪い取る」

※

自らの父親の生き様を否定した武田晴信は、すべてにおいて信虎の逆を行かなければならない。その上で、天下無双の名君にならなければならない。そうでなければ、父を追放した悪逆の娘ということになってしまう。故

に、信虎が和した諏訪を晴信は奪わねばならなかった。しかも、対諏訪戦こそが晴信の戦に次ぐ戦の人生を飾る、甲斐守護としての初陣でなければならなかった。

晴信は本能や感情ではなく、常に「理」でものごとを考える。

だから、そうせざるを得ない。

そのような晴信の性質を知っていた諏訪頼重はすでに晴信が諏訪を襲うことを予想し、関東管領上杉家とよしみを通じつつあった。

だが、晴信と勘助の主従のほうが素早い。同族の高遠を先に調略された。

諏訪頼重が画策していた武田包囲網は、間に合わなかった。

東の甲斐から武田軍、南の伊那から高遠軍が同時に攻め寄せてきたと知った諏訪頼重は、「高遠め。武田晴信が諏訪家から軍権を奪い取ろうとしている革命児であることがわからぬのか。愚か者め」と舌打ちしつつ、本城である上原城を捨てて桑原城へと逃げた。

ついに、槍を直接交えての決戦は、行われなかった。

武田軍だけを相手に一対一の野戦をやれば勝敗の行方はわからなかったが、一族である高遠に寝返えられて挟撃されたのでは致し方なかった。

だが、諏訪頼重がもしも「死中に活あり」と死を覚悟して決戦に及べば、あるいは万が一の勝利もあったかもしれない。

同族を裏切って攻める高遠軍の士気は低かったし、武田軍も当主が信虎から晴信に交代したばかりでまだ統制が取れていなかった。晴信は「これより諏訪は武田領となる。諏訪における乱取りは厳禁」「捕虜を奴隸として売るべからず」などの厳しい軍律を課そうとしたが、信虎時代とは違う、と乱取りに慣れた足軽たちが反発したのだ。足軽たちは農民である。戦に駆り出される際、乱取りを行わなければ稼ぎにならず、食えない。ことに甲斐ではほとんど米が取れないため、戦における乱取りが彼らにとっては生計を立てるための重要な仕事となっていた——晴信の理想主義は、過酷な現実と直面していたのだ。

しかし、諏訪頼重は決戦を避け、逃げた。

桑原城へ入り、武田の使者と対面した。

諏訪家の安堵を条件に、降伏した。

頼重には妻の禰々がいる。禰々は晴信の実の妹である。武田家は裏切りを許さないが、決して一門を殺さないという掟がある——諏訪頼重は「武田一門となっている諏訪家が滅ぼされることはあるまい。軍権は奪われるであろうが諏訪の血を絶やすことだけは免れる」と苦渋の決断をしたのだった。

逆に言えば、諏訪頼重は武田の一門であるからこそ晴信に「甘さ」を期待してしまったのだろう。

もしも諏訪頼重が武田一門でなければ、降伏することなど考えず、枕を揃えて討ち死にしたであろう。

もっとも、その場合は、諏訪家に潜伏していた猿飛佐助が禰々を無事に救出しただろうが。

「これほど容易に城は落ちるものなのか。それがしの二段構え、三段構えの策も無用であったか」

諏訪を行軍する武田軍——これまで脳内では無数の城を攻略してきたが、軍師としての実戦は生涯においてはじめてとなった山本勘助は、拍子抜けしたような表情のまま、その軍の最後尾を進みながら馬上で揺られていた。

その勘助の馬の尻には、少女忍者の猿飛佐助がちょこんと腰掛けていた。

「軍師殿。拙者、諏訪で無駄飯を食らっていただけでござるが、仕事料は満額いただくでござるよ」

「持っていけ。禰々さまのお命を守るためならば、無駄銭ではない。常に万全の策を準備してこそ軍師よ」

「ウキ～。ありがたくいただくでござるよ。暗殺仕事よりも、姫の命を救う仕事のほうがやりがいがあるでござるな。軍師殿は一見いかにも陰気なように見えて、その実は妙に陽気でござる。そうでなければ、武田晴信さまも軍師殿を召し抱えたりはしなかったでござるよ」

「軍師稼業に陰気も陽気もない。それがしは、長年夢に見てきた城の攻略に

夢中になっている子供のようなものだ。ただ、この脳内にこんこんと溢れ出る軍略を実現できる場を求めてきただけだ。今、それがしは感動している。わが軍略が、まことの諏訪の城を落としたのだ。それも、一兵も損じずに」
「軍師殿はきっと戦に敗れて死ぬ時も、ご陽気でござろうなあ」
「それがしは敗れぬ。たとえ敗れても、御屋形さまを天下人にするまでは決して死ねぬ」

ともあれ、諏訪湖を望む諏訪神社下社において、降伏者である諏訪頼重と勝利者である武田晴信とが対面した——襷々との祝儀の席以来の、再会だった。

「諏訪湖は美しい。諏訪家の起源は、出雲から逃れてきた^{たけみ なかたのかみ}建御名方神の一族と聞くが、諏訪に根付いた理由もわかる気がする」

晴信は甲斐守護らしく威風堂々と語る練習を、勘助・信繁とともにこれまで重ねてきた。

こなれてはいないが、祝儀の席で会った^{かつち よ}気弱な武田勝千代とはまるで別人である。諏訪頼重は「諏訪家は神代以来の血統を守ってきた^{おおほうり}大祝家。よもやその血統を絶やすのではあるまいな」とそんな晴信に疑いの目を向けてきた。
「諏訪家は武田一門。頼重どのには以後も変わらず、諏訪神社の大祝家として務めていただく。頼重どのと襷々の子に、跡を継がせる」

「俺から軍権を取り上げておいて、跡を継がせるもなからう」

「あたしは人々の信仰は尊重するが、神官や坊主が戦っていい道理はない。乱世の元凶となる。戦は武家がやるもの。現に信濃では守護の小笠原家に従う者が少なく、国人が乱立している——これも神氏である諏訪家が国人として割拠しているためだ」

「そなたは信濃全土を征服するつもりか、武田晴信。不可能だ。俺が一戦も交えずに降伏したのは、武田一門であるから、そして神氏であるからにすぎん。他の国人たちは違う。武田一門でもなく、神氏でもない。降伏などすまない。ことに、小県から北信濃^{よしきよ}一帯を支配する村上義清はその性質孤高にして

その武勇は狼の如く。蛮勇の信虎ならばいざ知らず、姫武将ごときが勝てる相手ではない」

「父上のようにあたしを文弱の徒となじるのか、諏訪頼重？ あたしが文弱の徒なら、そなたが降伏したのはなぜか」

「違う。そなたは女だと言っている」

「戦の勝敗は一騎討ちでは決まらない。戦の勝敗を決めるものは、経済力、兵站、兵の練度、行軍速度、将の軍略と計略にあり。あたしが男であろうが女であろうが、関係はない」

「書物のみで戦を学べばそう考える。しかし世の中には、桁外れの勇将というものがいるのだ、武田晴信。ことに、北国にはな。気候温暖な諏訪や甲斐にはいそもない一騎当千の英傑が、雪深い北国には実在する」

これよりそなたには甲斐で禰々と暮らしていただく、と晴信は問答無用で言い放った。

「なんだと。大祝の職は安堵あんどするといった約束は嘘か！」

「嘘ではない。甲斐に住んでいただくのは、諏訪の情勢が安定するまでの間の話だ。あたしはこれから、高遠を始末しなければならない」

違う。以前に会った時とはまるで違う、と諏訪頼重は息をのんだ。

「……女狐め。やはりそなたは、禰々との祝言の場で暗殺しておくべきだった。暗殺しそこねたのが俺の運の尽きだった……」

「違うな。そなたがあたしに刺客を放ったことで、あたしは窮地に追い詰められ、生まれ変わることができたのだ。あのままあたしを放置しておけば、あたしは相も変わらず父を恐れ、駿河に逃げて今頃は孫六とともに富士山の絵でも描いていただろう」

藪から蛇という奴か。これも運命か、と諏訪頼重は自嘲じちよう気味に苦笑した。

「俺を殺すつもりではあるまいな」

「二度と武田一門に叛逆しないと誓えば殺さぬ。次に裏切った時は、たとえ一門といえどもどうなるかはわからない。保証はできぬぞ諏訪頼重」

こやつはもはや父親の罵倒に怯えて震えていたあの姫武将ではない。次に

逆らえば、ほんとうに殺されるかもしれない。

だが、この強気の晴信の裏には、あの読書好きの柔和な勝千代がまだ存在していることも、諏訪頼重は理解できた。

もしも信虎の長子として生まれていなければ、襦々のような平穏な姫としての人生を過ごせたかもしれないということも。

同様に、俺がこの姫武將に刺客を放たなければ、武家としての諏訪家の歴史がここで終わるようなこともなかったであろう、ということも。

(俺が放った刺客がこの知的で感傷的な姫武將の生涯にとっての第一の転機であったとすれば、第二の転機は……)

諏訪頼重は「俺はそなたの知謀と野望を恐れたが故に、こうして墓穴を掘った。恐れが、恐怖が、自ら忌まわしい災いを呼び寄せることもある。恐れれば恐れるほど恐怖の原因が迫ってくるということもある。これ以上俺を恐れるのはやめろ。一門衆の俺を殺せばそなたは父親以上の悪人となるぞ。よく考えろ晴信。俺をどう扱うか、生かすか殺すかが、そなたの生涯を定めることになる」と晴信を睨みながら、席を立っていた。

「決して一門を殺さない。それが武田の掟であろう」

諏訪頼重が退室したのち、板垣信方、甘利虎泰、^{よこた びちゆう}横田備中、^{おぶ ひようぶ}飯富兵部ら「武田四天王」をはじめとする重臣たちが室内に入ってきて、軍議となった。

末席には、軍師の山本勘助。

晴信の左手前には、妹で副將の次郎信繁。

その隣に、「戦をやるなら、なぜ最初から俺を呼ばない！」と急ぎ駿河から戻ってきて参戦した弟の太郎。

血気盛んな横田備中と飯富兵部は「もう終わりか？ こんな戦もあるのか」「あたしたちはまだ戦ってねえぞ、つまらねえな」と首を捻っている。

老将の板垣と甘利は「諏訪頼重どこのの処置を間違えると、諏訪の各地で反乱の火の手があがりましょう」「ううむ。諏訪を武田家直轄とするなど考えたこともなかった」と戸惑っていた。

晴信の戦い方は、正面からの激突を得意とした信虎時代とはまるで違う。

そもそも、戦いらしい戦いを行わないうちに、手品のように諏訪家を併呑してしまったのだ。

山本勘助というあやしげな浪人あがりの軍師が「高遠調略」という詐欺まがいの奇策を用いたことを、四天王たちもすでに知っていた。

気弱だった晴信に父を追放せよと勧めたのも、この謎の軍師であることも。「板垣と甘利の意見はもったもである。諏訪頼重は武田一門。あたしは襴々の夫を殺したりはしない」

晴信は諏訪頼重の命を救うことを家臣団の前で繰り返した。

安堵した板垣信方が「祝着至極」と述べた。

「しかし、御屋形さま。この諏訪を誰が統治いたしますか。諏訪は信濃平定のための要。武田一門のしかるべき人物でなければ——」

「ここは次郎さまか、あるいは太郎さまであろうのう」

と、甘利虎泰。

だが、晴信の人事は意外なものだった。

「諏訪では決して失政は許されない。故に諏訪の城代は、筆頭家老の板垣信方に任せる」

家臣団は皆驚いたが、板垣自身が誰よりも驚いていた。

「御屋形さま。一門衆に人材がないのならばともかく、かほどの要地は一門衆に預けるのが武田の習わしでございます。拙者はあくまでも武田家にお仕えする家臣の身」

「板垣。あたしが頭領である限り、武田家では家臣と領民、武田一門の区別はない。今後は、皆が武田家というひとつの家族でありひとつの国であると考えてほしい。これからの武田家では功を挙げた家臣へ城、領地を与えることを惜しまない。板垣のみならず、甘利や横田たち諸将についても同等に扱う。諏訪を完全掌握していない今はまだ城代を任じるに留まるが、いずれは信濃の領土を家臣団に与えることもできよう」

「身に余る光栄。ですが拙者が甲斐を離れば、行政に支障が出る恐れも」

「あたしの隣には次郎信繁がいる。それに、武田家の領土拡張に従って人材を増やすため、若手の姫武将たちはあたし自身が直接育成したい。馬場信房、春日源五郎、飯富兵部の妹・三郎たちを。信濃は、広大だから」

「御屋形さまは、すでに信濃の領国経営についてもお考えでありましたか」

「いずれは若き姫武将たちだけで信濃を切り盛りできる日が来るだろうが、今この諏訪を託せる者は板垣、そなたしかいない」

板垣は「恐れ入りましてござりまする」と頭を下げた。

その戦や内政に常識を無視した奇矯なやり方が多く、次々と外様の者を拾い上げてくる晴信のやり方に戸惑っていた諸将も、「一門にあらざとも手柄を立てれば一国一城の主ともなれる」という晴信の人事を目の当たりにして目の色を変えた。

「だが皆の者。武田家では、一に治水灌漑。二に民の忠誠度。三に町の商業奨励。人材登用と育成が四番目。戦は五番目とする。国を富ませねば強兵は養えない。国を富ませるためには農業と商業を栄えさせねばならない。戦費を調達するために民を搾り取ったあげく一揆を起こされるなどは論外。合戦は、あくまでも余力で行う。乱世といえども無理押しでは国力が長続きしないことは、父上の失政からも明らか。あたしは決して急がない。諏訪を併呑したとはいえ、甲斐はまだ貧しい。諸将も、功を焦って急がぬように。一朝一夕では日ノ本最強の軍団は造れないのだから」

用心深いこった。いちいちまどろっこしい姫さまだねえ、と飯富兵部が諏訪みそに漬けたスルメを噛みながら苦笑している。

「むろん、侵掠する時は火の如く進む。今回の諏訪攻めのように——」

軍議が終わったあと、新たに諏訪代官となった板垣信方は山本勘助に呼び出された。

密談が行われた。

板垣信方は顔をしかめた。

「なぜ軍議の席で直接言わぬ。勘助」

「御屋形さまの口からは、あくどい謀略に関しては漏らしてはならぬのです。すべての謀略は、軍師であるそれがしの一存で行われねばならぬこと」

「……それがしも、薄々察している。約定通り高遠に諏訪を半分くれてやることはない、高遠との約定は反故^{ほご}にせよ、というのであろう」

それがそなたの謀略とやらの手というものだ、と歴戦の老将・板垣信方は心配顔でつぶやいていた。

「御意。諏訪頼重どこの軍権は取り上げますが、大祝の職は解きませぬ。上原城も高遠には渡しませぬ。御屋形さまが甲斐へ戻れば、高遠頼継は激怒して諏訪に攻め寄せてまいりましょう。その時は」

「それがしは諏訪よりわざと敗走し、高遠を増長させ中央まで引きずり出して甲斐の全軍で討つ、か」

「左様^{さよう}」

「委細承知。しかし勘助」

「は？」

「今回の諏訪戦はなるほどそなたの謀略で武田が勝った。ほとんど槍も交わさず、一兵も損じずにな。高遠も討てるであろう。さすれば諏訪に続いて伊那も武田領となり、信濃の南半分のほとんどを御屋形さまは平定することになろう。しかし、謀略戦は真の合戦とは言えぬぞ。はたして謀略だけでどこまでも勝ち進められるであろうか？」

板垣信方は歴戦の勇将であるが、兄弟分の甘利虎泰とは異なり常に熟考する智将だった。内政、外交、ともに得手であり、それ故に筆頭家老の地位まで上り詰めたのだ。

その板垣にしてみれば、勘助と晴信の謀略は、あやうかった。

二人には実戦経験が少ない。すべてが机上の理屈から成り立っている、と見えた。

「勘助。いずれは謀略が容易に通じぬ猛者と相対する時が来よう。その時、たとえただいちどの敗北であろうとも、御屋形さまが討たれてしまえば武田家はその瞬間に終わるのだぞ」

「あいや。御屋形さまは討たれませぬ。姫武将でございますれば——」

「それが机上の理屈なのだ。乱戦となれば、姫武将不殺の慣習など足軽どもは守っておられぬわ」

「ならば、本陣に敵を入れるような大敗北をせねばよろしいのです」

「聞け勘助。御屋形さまは、ご自分のお父上を追放した。今さら出家して降伏すると言っても、相手に信用されまい。降伏を許されたとしても、必ずや謀殺されることになるろう。御屋形さまの父親追放劇は、まことにもって背水の陣とも言うべきものなのだ。御屋形さまは、もはや没落すること、許されぬ」

「信虎さまを追わねば、御屋形さまが追われておりました」

「わかっている。御屋形さまをけしかけたそなたを恨んでいるのではない。あの二人は、いずれ雌雄を決せねばならぬ運命にあった。そなたが御屋形さまのもとに現れたのも、やはり運命であろう。しかしな勘助。世には、そなたの想像もつかぬような英雄豪傑がいる。御屋形さまは決して戦上手ではない。甲斐兵も一瞬の爆発力こそ誇るが軍団としての統制力がなく、精強とは言えぬ。甲斐は多くの国人による寄り合い所帯だからな。そなたと御屋形さまが考えている無敵無敗の武田軍を完成させるまでには挫折も敗戦も味わわねばならぬだろう。だがその時に、御屋形さまが討たれてしまえば意味がないのだ」

心に留めておきまする、と勘助は頭を下げた——が、いずれ一戦二戦で局地的な黒星をつけられることはあろうとも、それほどの大敗北を自分と晴信が喫することになろうとは、勘助には信じがたかった。

勘助が諸国を見聞したところ、自分に匹敵する軍師はどこにも見当たらなかった。西国には毛利元就もうり もとなりという全身が悪謀から成り立っている怪物のような武将がいるが、元就は毛利家の当主であって軍師ではない。その分、できることは限られている。東国では、かろうじて駿河の太原雪斎だいがんせつさいくらいであろうか。だが雪斎はもともと学僧であり、堂々の軍略は一流なれど汚い謀略についてはわずかに腰が引けることがある。しかし自分は勝利のためならばた

めらわずにどんな手でも用いることができる——御屋形さまの勝利のため、御屋形さまの野望のためならば、いつでも地獄へ落ちる覚悟はできている。

「よいな勘助。主を悪名から守るために汚名を被ることだけが軍師の仕事ではない。主の危地に命を投げ出して身代わりとなり死ぬことも、軍師、いや家臣のつとめであるぞ。敗北を知らぬそなたにはまだわからぬであろうが……」

「あいや。その覚悟はございます」

「決して御屋形さまの純粋な志を汚さぬことだ。御屋形さまは、才気に溢れたお方。その才気を、常にお父上から否定されてきたために、ついにはかかる追放劇となった。御屋形さまの志を黒く濁った野望の^{おり}澱にしてはならぬ。勘助。そなたには、義がない。そなたを動かすものは、才のみだ。不遇な子供時代を過ごされた御屋形さまと長年孤独に諸国を流浪してきたそなたとが、馬が合うことはわかる。だが才気という部分において、二人は合いすぎる。それがむしろ、それがしには心配なのだ」

「板垣さま。義では戦には勝てませぬ。それこそ、神のごとき武辺の持ち主でもない限りは。そのような者は人間の世界にはおりませぬ」

「いや、勘助。乱世の戦にこそ、正義が必要なのだ。御屋形さまを甲斐の荒くれ大名のままに終わらせるつもりならば不要だが、もしも御屋形さまを天下人にしたいとそなたが願うのであればな。義なき者は、民の心を得られぬ故に、決して天下人にはなれぬ。しかも御屋形さまは父親追放という悪行をすでに犯された。二度目は許されないのだ」

「板垣さま、それこそ儒学に毒された考えでござりまする。乱世に、義など不要のもの。夢見が悪い、世間体が悪いというのであれば、力で天下を盗った暁に、踏みにじってきた者たちを存分に供養しその無念に報いればいいではありませんか。神社仏閣は皆、そのために勝利者がこしらえたようなもの。諏訪神社なども、古き世に滅ぼされた出雲の国から落ち延びてきた敗残者を勝者、すなわち日ノ本のわれらが祭っているにすぎませぬ」

「神仏を恐れぬそなたにこれ以上説いても無駄か。そなたが御屋形さまに恋

心でも抱いておれば、少しは変わるのだからな」

「まさか。身分いやしきこの勘助が、偉大なる御屋形さまに恋心など。それがしはそれほど厚顔でも無恥でもありません。それがしは御屋形さまのおんために全知全能を振り絞り捧げ尽くすと決意した、一介の軍師にございます。戦のために生き、死にます。恋など軍師には無用。そのような私情を挟めば、知恵が歪みます故」

「それが御屋形さまとそなたにとって幸か不幸か、結果はまだわからぬ。御屋形さまの婿取りの件も、なかなか進まぬしな」

「婿取りは姫大名にとって最大の切り札。しかも一度しか切れぬ手札。慎重にもなりましょう」

「勘助、そなたは誰が御屋形さまに相応しいと考える？」

「婚姻同盟の相手ですか。むろん、できうる限り大国の主がよろしい。駿河の今川とはすでに同盟を結んでおります故、第一候補は小田原の北条。だが北条家の若き当主・氏康は姫武将。となれば、まだまだ切り札は使えませぬ。そうだ。あるいは北信濃を挟撃するために、越後の長尾と……」

「……そなたに聞いても、そういう乾いた答えしか出てこぬな。しかし御屋形さまはお年頃の姫であるぞ。この件は甘利たちと相談して考えることとする」

ともあれ高遠についてはそなたの策通りに動こう、と板垣がうなずいた。

そこへ、晴信の小姓として取り立てられた春日源五郎が飛び込んできた。

もともとは農民の娘で、佐助に襲われた晴信を救ったことがきっかけで姫武将候補として見込まれた、明るい少女だった。

その天真爛漫らんまんさがどこか襦々に似ていて、晴信に気に入られている。

「たたたたいへんです！ ご家老さま、軍師さま！ 駿河より客人です！ 逃げましょう！」

「源五郎？ 駿河は同盟国。なぜ逃げねばならぬのじゃ」

「それがですね、とっても面倒な話のようなんですっ！」

「わかった、すぐに行く」

しかし晴信は、駿河からの使者にすぐに会えなかった。

控えの間に戻り、微熱を感じて横になろうとしていたところに、禰々が来たからだった。

「姉上！」

禰々は、怒りと悲しみのあまり錯乱していた。

諏訪と武田の合戦に巻き込まれた禰々は心労でやつれ、ふくよかだった頬もこけていた。

あのひまわりのような笑顔はもう戻ってこない、と晴信は悟り、胸を痛めた。

「父上を駿河に追放し、わたしの夫を攻め滅ぼすだなんて！ 姉上はいったいどうなされてしまったのですか？ あの優しい姉上はどこへ行ってしまったのですかっ？」

「……ごめんなさい。武田家を守るため、仕方がなかったの。武田家が領土を拡大するために、諏訪はどうしても必要だったの」

「そんなことで……頼重さまもれっきとした武田家一門です！ 姉上は、一門を裏切ったのよ！」

「あたしは五年先、十年先を考えているの。今はわからないかもしれないけれど、信じて。頼重どのには引き続き諏訪神社の大祝職を務めてもらうから、安心して跡取りを産みなさい。武田と諏訪の血が混じった子を」

「いやよ！ 姉上に殺されるかもしれない子供を、産めるはずがない！」

「禰々。あたしはそんなこと、決して」

禰々の叫び声を聞いた太郎と次郎が、慌てて室内に入ってきた。

「そうかんしゃくを起こすなって、禰々。姉上も大変だったんだぜ。先に姉上に刺客を放ったのは諏訪頼重だ。しかもお前との祝言の最中にだぜ」

「太郎！ その話を禰々にしてはだめ！」

「だって姉上。ほんとうのことだろう？ これじゃあ姉上一人が悪者みてえじゃねーか」

「いいのよ、あたしは」

「どうしてみんな、姉上の味方をして父上を追放したりしたのっ？ 武田家は一門を守る、それが掟だったはず！ 信じられない！」

泣き叫ぶ禰々の頭を、次郎がそっと撫でた。

「父上は、姉上を廃嫡して駿河に追放しようとしたの。わたしを武田の跡取りにするために。でも姉上もわたしも、それを望まなかった。わたしと姉上とで決めたことなのよ」

「だったらわたしを、いっそ武田一門から切り離して！」

食事を取っていないように見えるわ。禰々に薬師くすしを、と晴信はつぶやき、そっと部屋を出た。

早く、駿河からの使者に会わなければならない。

どうやら火急の用件らしい。しかも、武田家にとっても大きな難題らしい。

「姉上！ 話はまだ終わっていないんだから！ 逃げないで！」

「あたしには武田家当主としての仕事はまだあるの。太郎、次郎。禰々をお願い」

「任せとけ！ なあ禰々、旦那と二人で駿河の親父んところにでもしばらく静養に行けばいいんじゃないか？ 駿河の海を見ているとすっきりするぜ？」

「ごまかさないで兄さん！ 頼重どのまで駿河に追放するつもり？」

「禰々。頼重どのが姉上を恐れて暗殺しようとした時点で、両家はこうなるしかなかったの。頼重どこの命を奪わなかったのは、姉上が禰々を傷つけたくなかったからよ」

「次郎姉さんが武田の頭領になればそれでよかったのに！ 姉上は恐ろしい人だわ！ 父上は残酷な人だけれど、身内の者には優しかったのに。姉上は……！ まるで武田一門であろうが自分の野心のためならお構いなしに……！」

「禰々、どうか落ち着いて。姉上は、諏訪頼重どのをあやめたりはしない」

(まさか襷々があればほど傷つくだなんて。頼重の命を保証すれば、少しは落ち着いてくれると思っていたのに。あたしが父上を追放したから？ それとも、夫婦の仲というものはあたしには理解できないものなのかしら)

晴信は心身の疲労から来る微熱を再び額と胸元に感じながら、駿河よりの使者を引見した。

それはまさに、新生武田家の運命をも左右する「火急の用件」だった。

駿河の今川家と、小田原の北条家。

かつては盟友だったこの両家は、今は乱世の定め故に対立していた。

使者によれば、北条軍が占領している駿河東部の河東地域に今川軍が出兵し、北条軍と睨み合っているというのだ。

晴信は、援軍を要請された。

今川には、父・信虎を押しつけた借りがある――。

晴信は、先に使者と対面を済ませていた勘助に目配せした。

(武田は今、目の前の諏訪平定戦で手一杯だけれど、今川と北条を仲裁して勘助がもくろむ「三国同盟」の布石を打つ絶好の好機でもあるわね)

(御意。しかしなにやら襷々さまが叫んでおられたようですが……)

(その件は次郎たちに。今は、駿河の件よ)

本来ならば、諏訪・駿河で二方面作戦を展開する愚だけは避けねばならない。武田にはそれほどの戦力はない。それでも、新生武田家が飛躍するために今は賭ける時だ、と晴信は決意した。ここで退いては、今川にも北条にも臆病者と侮られる。それでは、武田に未来はない。

晴信は「すぐに武田も出兵する」とうなずいていた。

休む暇はなかったし、襷々にかまってあげられる時間もなかった。

うなずきながら、武田家当主として君臨し続け戦い続けてきた父・信虎がなぜいつもあれほど荒れ狂っていたのか、晴信ははじめて少し理解できたような気がした。

戦は少しずつ、人の心を壊していく――いかに謀略を用いて血を流さずに勝つことを心がけても、それでも戦うごとに穢^{けが}れのようなものが胸の奥に溜

まっっていくのだ、あたしに耐えられるだろうか、と晴信は思った。

(戦というものは、狂わねばできぬ。狂い続ければ、そなたのような心弱き者の心身は確実にむしばまれる。駿河におれば、諏訪頼重などに狙われることもない。息災に暮らしたいならば、血で血を洗う戦など忘れることぞ——)

信虎が追放劇の直前になってはじめて自分にかけてくれたあの優しい言葉を、晴信は心のうちで復唱していた。

しかしもう、後戻りはできない。すでに、賽^{さい}は投げられたのだ。

(父上。あたしは、あたしの才能を天下に知らしめるために、あくまでも前へ進みます)

※

相模の小田原城を本拠とする北条家は、新興の戦国大名だった。

初代・北条^{そううん}早雲は、もとはといえば伊勢から東国へと流れて来た浪人で、駿河の名門・今川家の家臣だった。その北条早雲が関東の騒乱に乗じて下克上によって伊豆を奪い、ついには箱根の坂を越えて小田原城を奪い、戦国大名として独立したのである。

北条早雲の野望は、京の都ではなく、関東の広大な平野へと向けられていた。

都は陰謀と因習と怨霊^{うごめ}が蠢く公家の世界。平氏。源^{みなものよしなか}義仲。源^{よしつね}義経。都に関わった武家はことごとく滅びてきた。武家はあくまでも関東に政権を建てねばならない。京の室町に幕府を置いた足利幕府の体制は、御所を二つに割った南北朝の動乱、幕府と関東公方との対立、さらには応仁の乱による戦国時代突入という失策続きに終わった。

だが、かつて武家政権が成功した時代がある。源^{よりとも}頼朝が京に背を向けて鎌倉に幕府を開き、その幕府を北条氏が支えてきた時代だ。鎌倉幕府は、あの日ノ本最大の国難とも言うべき元寇をも乗り切った。

早雲は、そのいにしへの北条氏のように関東に強力な武家政権を樹立し、いっそ混沌の元凶となってきた京の都から事実上独立するつもりだった。

故に、早雲とその一族は、北条を名乗り、関東制覇の野望を隠そうともせず武蔵侵攻を開始していた——最大の敵は、関東管領上杉家。さらには管領家と同族の扇谷^{おうぎがやつ}上杉家や、古河公方足利家^{こがくぼう}など、関東における足利幕府の要職に就く諸家もことごとく一掃しなければならなかった。北条二代目氏綱^{うじつな}は、武蔵の江戸城、さらには河越城を奪取し、武蔵における北条家支配の基盤を固めたところで、没した。

そして今、祖父と父が着々と領土を拡大してきた北条家を継いだばかりの若き姫武将が三代目・北条氏康^{うじやす}。

父・氏綱は祖父・早雲の遺志を継いで武蔵の大部分を征服したが、課題も残していた。かつての同盟国である駿河今川家との紛争だった。今川家で家督を巡る内紛^{よしもと}が起き、今川義元が勝利した際、今川義元はかつての敵であった甲斐の武田信虎から義妹を迎えて同盟を結んだ。さんざん今川の要請で武田と戦わされてきた氏綱はこれを不服として今川と手切れし、今川領へ侵攻。駿河東部——富士川より東の地域、いわゆる「河東」を軍事占領した。

ところが、これが順風満帆だった北条のつまずきとなった。東に、関東管領上杉家を盟主とする関東連合軍。西に、駿河今川。二つの強敵を同時に抱え、二方面作戦を余儀なくされることとなったのだ。氏綱は二方面に拡大した戦線を駆け回るうちに病を発して死んだ。

まだうら若き色白の少女・伊豆千代丸^{いずちよまる}こと北条氏康は、予定よりもはるかに早く、唐突に北条家三代目に就任しなければならなかった。

「おばば。早く小田原城に帰りたいわ。私は合戦が嫌いなの。父上は、どうして戦線を拡大するだけ拡大してしまったのかしら……河越城に籠城している『つな』(北条綱成。氏康の義妹)が心配だわ」

今川軍、富士川を渡り河東の地奪回の戦を興す。

同時に、関東連合軍が武蔵で策動を開始。

氏康は家督を継ぐなり、いきなり北条家滅亡の危機に立たされていた。

河東の地を進軍しながら、馬上で氏康は「帰りたいわ。早く帰りたい」とため息をついている。

長い黒髪と色白の肌、折れそうにきゃしゃな身体を持つ彼女は太陽の光を嫌い、乗馬も弓も槍も苦手な戦嫌い。だが今川義元のような公家趣味はなかった。小田原城の一角に設けた自室の窓から相模の海を眺めている時がいちばん幸せだと感じるようなところがあり、いわゆるひきこもり癖の持ち主だった。合戦は同い年で義妹の勇将・綱成つなしげに任せきりという形になるはずだったが、父が二方面作戦を開始してしまったために、今は綱成が武蔵で、氏康自身が駿河で兵を率いることになっていた。

「ふおっふおっ。そうは申しましても姫。戦を仕掛けてきたのは今川のほうですじゃ。降りかかる火の粉を払わずして、北条の家は守れませぬぞえ」

氏康に付き従う年齢不詳の小柄な老婆が、歯の抜けた口をすぼませながら笑った。

初代・北条早雲げんあんの妹、北条幻庵。

もはや長生きしすぎて、実年齢は不詳。

本人は「わしは早雲どのの妹ではなく娘じゃ。まだまだ若いおなごじゃ」と言い張っているが、早雲の生前から早雲よりもはるかに老けて見えたので、一説によれば実は早雲の母親なのではないかとすら言われている。

ともあれ、幻庵の正体と実年齢については、氏康といえども深く詮索することはまかりならない。「おばばはまだ若いのじゃーっ！」と激怒されるからだ。

「いやはや。今川軍だけならば蹴散らせるかと思うておったが、自らの父親を追放した武田晴信の援軍が手強いわい。このままでは三島の地まで奪われることは必定。姫、今川と和睦するなら今日が最初で最後の好機ですぞ」

「この関東の主たるべき私が今川ごときに和を乞うなんて屈辱だわ。ところでおばば、あなたには長久保城の守将を任せたはずなのに、どうして一人で城を抜け出して私の隣にいるわけ？」

「ああ。長久保城はもうもたぬ。落城してしまう前に夜逃げしてきたのじゃ。

おばばがおらねば、気位ばかり高い姫はまともに今川と交渉できぬであろうでな。おばばが場を賑やかしてやろうのう。ふおっふおっふおっ」

「味方を置き捨てて……逃げ足が速いおばばね。長生きするわね」

「常に戦場で、さっさと小田原城に帰ることばかり考えている姫には言われとうない」

「あら。小田原城は箱根の山と駿河の海に守られた天険の城。あすこへ籠城してしまえば、一年は容易に持ちこたえられる。その一年のうちに城を包囲した敵軍を風魔を用いて分断・混乱させてしまえば、必ず勝てるのよ。私は幼い頃から、いかにして敵軍と正面から戦わずに勝つかを考え抜いて、小田原城への籠城こそ至高という結論に達したのよ」

「そもそも、敵さんは一年も兵站がもたぬわいて。足軽どもは、田畑の収穫時期には国元に帰らねばならぬ。長滞陣をすればするほど、士気は落ち風魔の謀略にもかかりやすうなるわ」

「そういうこと」

氏康は今、善徳寺へと向かっている。

今川・武田との停戦交渉の場だ。

戦況は、圧倒的に今川・武田が優勢である。

北条は主力が河越城に釘付けになっているため、河東にはわずかな兵力で臨んでいる。くわえて、氏康は戦下手だ。

一方、今川方には武田晴信の援軍がついていて、これが意外にも精強だった。姫武将の晴信は父・信虎とはまるで正反対の文弱の徒、合戦での強さは北条氏康と似たり寄ったりだというのがもっぱらの評判だったが、いざ武田軍と槍を交えてみるとその噂が大外れだったことがすぐにわかった。

「武田晴信は姫と似たような娘らしいのですが、山本勘助ちゅう得体の知れぬ初老の醜男軍師ぶおとこが補佐しておるのじゃな。あれが妙に采配がうまい。ふおっふおっふおっ」

「あらそう。おばばも、得体の知れなさだけは山本勘助並みなのに、戦は下手よね」

「くわーっ！ 北条早雲の娘であるおばばとあのような者を一緒にするでな—い！」

「あら？ おばばは早雲の妹、じゃなかった？」

「そうじゃったかのう？ おばばは年でのう、もうろくしておるのでのう……ふおっふおっ。ともあれ、この交渉の席は二方面作戦の愚を抜け出す千載一遇の機会。鉄面皮の冷血娘の本性を出すでないぞ」

「おばば。私は常に冷静なだけよ。鉄面皮だなんて、やめて頂戴^{ちようだい}」

駿河・善徳寺。

武田晴信が今川の援軍要請に応えた真の目的は、窮地に追い込まれている北条を潰すことではなく、今川と北条の和睦を成立させることにあった。

勘助と晴信の大戦略「三国同盟」への布石を打つためである。

そのため、緒戦において北条軍を敗走させたあと、晴信はこれを追撃することなく北条方・今川方それぞれに「このあたりで和睦を」と働きかけた。

この日、東国を代表する三人の姫大名が、善徳寺で顔を合わせた。

甲斐の武田晴信。

駿河の今川義元。

相模の北条氏康。

日輪のように艶やかな義元と腺病質で青白い肌を持つ美少女・氏康は、互いを見るなり露骨に不機嫌になった——これまでの河東一帯を巡る紛争で感情的にもこじれていたし、それに二人の姫は性質も容姿もあまりにも対照的すぎた。

この二人を二人のままで対面させている限り、和睦は不可能なはずだった。

だがこの場には今、「第三の勢力」晴信がいる。

晴信は文弱の徒と呼ばれていたはずだったが、廃嫡されかけるという窮地にやおら虎の如き本性を現し、父を追放して甲斐一国をとりまとめ、諏訪家との婚姻同盟を破ってたちまち諏訪を奪った。

さらにはこのたびの河東の乱においても、甲州軍を見事に進退させ、ただ

の学問肌の姫武将ではないところを今川・北条に証明してみせた。

義元も氏康も、晴信の侮れない実力を認めたからこそ、この交渉の席に着いたのだった。

「お初にお目にかかる。あたしが甲斐の新たな守護、武田晴信だ」

義元ははじめて見た晴信の中に教養人らしい気品を感じ取って「もっと山猿のような姫かと思っていましたが、意外に雅びな一面もありますのね」とそれなりに見直し、氏康は「甲斐におとなしくひきこもってられるような顔には見えないわ。いかにも戦好きの野蛮人だわ」とまるで逆の感想を抱いた。

(勘助。豪快な猛将の演技が効き過ぎているのかしら。北条氏康にほんものの山猿だと思われているみたい)

晴信は泣き言を言いたかったが、素顔の勝千代の姿を外交の席で見せるわけにはいかない。勘助は「将たるものとして悠然と構え、武辺者の英雄を演じなさいませ。さもなくば敵に侮られます。しかし感情をあらわにしてもなりません。心のうちを読まれます」と、気を抜くとすぐに「勝千代」に戻ってしまう晴信を常々きつく教育している。

そして。

「拙者、御屋形さまにお仕えする軍師、山本勘助。今川と北条の戦いをこのあたりで終わらせるため、御屋形さまは駿河へ出陣なされたのです」

晴信の隣には、その隻眼の軍師・山本勘助が。

今川義元の隣には、黒衣の宰相・太原雪斎が。

「どこかで見た顔と思えばそなた、かつて今川家に仕官願に来たことが。武田家に召し抱えられていたとは」

「は。今川義元さまにはどうにもあやしげであると袖にされましたが、わが御屋形さまに拾っていただきました。御屋形さまはそれがしがいかにもあやしげであるところがかえって気に入られておるご様子」

「信虎どの追放劇の裏には、そなたの策謀があったか。なるほど。甲斐でなにがあったか、おおむね理解した。しかし、これまで叛服常なく互いをけん

制し合ってきたこの三国が和して無益な戦を避けるというそなたの案は、実に良い」

「ふおっふおっ。勘助どのも雪斎どのも、見るからにあやしげな男じゃのう」

北条氏康の隣には、一族の長老・北条幻庵が。

三国を代表する策士たちもまた、集まっていた。

「ふおっふおっ。特に勘助どの。その面相と獣のような視線はいかん、いかん。そちにはおばばの絶品の尺八を味わわせてはやらんわ」

「ぐわあ！ 不気味な妖怪婆め！ そんなもの要らぬわ！ それがしを殺すつもりか！」

勘助、あなたが感情を剥き出しにしてどうするの、と晴信がため息をついた。勘助には、なぜか「女嫌い」という癖がある。単に人と人としてつきあう分には問題ないのだが、男女のことを持ち出されると突然^{ろうばい}狼狽する。特に年増とかばあさんは絶対にだめらしい。

「雪斎どのは、まあ、年寄りとはいえ男前じゃからの。わが尺八の腕をちらりと見せてやってもよいぞ、よいぞ」

「拙僧は出家の身。遠慮いたす。ぶる、ぶる」

さすがの雪斎も怖じ気をふるっていた。

絶品の尺八をいただけるのならもらいましょうよ雪斎、とあどけない義元が笑っているが、雪斎は敢えて幻庵のおぞましい言葉の真意を伝えなかった。義元の耳が汚れると思ったのだろう。

「そちらにはうちの姫は嫁にやらんぞえ。北条家は関東の覇者となるべき家じゃからのう。今更、今川家の家臣には戻らぬわ」

ともあれ幻庵の軽口で、三者はこの場を支配していた異常な緊迫感から脱した。

理と利を唱えて和睦を提案するは、武田晴信。

言い聞かせる相手は、東海一の弓取り・今川義元。その片腕で勘助ですら能力を認める伝説の名宰相・太原雪斎。さらに、北条三代目氏康。早雲以来

の北条家の長老・北条幻庵。

この日この時こそが、晴信にとっては長い天下争奪戦レースへの公式デビューと言えた。

「初代早雲公以来、北条家の悲願は関東制覇。対する今川家は東海道を進み上洛し、足利幕府を再興する使命を持つ名家。つまり北条家は東へ、今川家は西へ進まなければならないはず。にも拘わらずわが父・信虎がかつての敵今川と同盟を結んだことが、両家の対立を呼び河東の乱を引き起こした。それ故に、今川家の西進策は遅々として進まず、北条家に至っては関東管領と今川の挟撃に遭って河越城は落城寸前。まずは、関東制覇と上洛という両家の志はいまだに変わっていないことを確かめたい。義元どの、氏康どの、いかがか」

晴信の目つきが変わった。

心優しい少女・勝千代のものではなく、甲斐守護・武田晴信の虎のような視線へと。

晴信どのは父君・信虎どのがおっしゃるように元来は柔和な学問肌の姫。これはあくまでも猛将を演じる芝居であろうが、しかしこの溢れる知性とそして隠しきれない野望の炎はただ者ではない……と太原雪斎は驚愕した。

幻庵のおばばも「ほう。この覇気。うちの姫とは大違い」と目を丸くしている。

そんな晴信にも動じない義元が「もちろん今川家はいずれ上洛するのですわ。足利本家、吉良家に次ぐ名門ですもの。それなのに北条さんが邪魔をしているのですわ。河東を返還していただければいいのでしたら、停戦を考えてあげてもいいですわよ」と高飛車に笑った。

御屋形さま一世一代の名演技にただ一人^{けお}気圧されていない。鈍いのか、それとも気位が高すぎるのか、これはこれである意味大物だ、と勘助は思った。

そして直感と分析力に秀でた北条氏康は、

（武田晴信。やはり、自分の父親を駿河に追放しただけのことはある。まるで飢えた虎。絶対に心を許してはならない女だわ。しかし、この女には一時

の感情に流されず「利」を計算して動くだけの知能の高さがある。あるいはこの私にも匹敵する知性が。あとは、この女の「志」さえ知ることができれば、歩調を合わせて有効活用することも可能。北条を二方面作戦の窮地から救うには、この女に賭けるしかない)

と素早く踏んだ。

「武田晴信。あなたの言う通り。私の、いえ、北条家の夢は、志は関東制覇。平将門公以来の武家の夢、都の貴族や公家たちに縛られない関東独立王国を建国することよ。本来、今川義元にも駿河にも興味はないわ。それに私には武田にも怨恨はない。あなたの父上・信虎公と、私の父・氏綱とは竜虎相搏つ激戦を繰り広げた仇敵同士だったけれど、期せずしてお互いにこうして若い世代に代替わりした」

「ならば、北条の先代が奪い取った河東の地を今川に返還していただく。それで今川・北条両家の和は成り、わが武田も今後は古き怨恨を捨てて北条を支援する。わが武田の悲願は、信濃の平定。米も塩も採れぬ甲斐に巣ごもっているのは、家臣も領民も苦しむばかり。あたしは必ずや信濃を奪う。そしてそのためには、上野こうずけに根を張る関東管領上杉家が障害となる」

「あら。上杉家は、北条の仇敵でもあるわね」

「そうだ。武田と北条は、同じ敵を持っている。われらの利害は一致しよう、氏康どの。いずれはこの三国がともに婚姻同盟を結び合って、三国同盟を成立させるべきだとあたしは思う」

三国同盟！ 雪斎さんが予言した通りの展開ですわ！ と義元が歓声を上げた。

「あらあらまあまあ。北を武田さんが、東を北条さんががっちり固めていれば、背後の憂いはいっさい消える。今川の上洛は簡単になりますわね、雪斎さん！ 尾張おだのぶひでの織田信秀さんさえ倒せば、都まではすぐですわ！」

「……御意」

しかし氏康は、浮かれない。顔色ひとつ変えず、能面のような表情のまま、晴信の心へと斬りこんだ。

「でも武田晴信。信濃を奪ったあとは、どうするの？ 関東は北条が。都は今川が。それでは、武田晴信の野望の終わりは、完結は、いったいどこにあるのかしら？」

あたかも「いずれあなたは今川から駿河の海を奪うのではなくて」と言いたげであった。

勘助が（鋭い女だ……！）と脂汗を流した。

しかし晴信とあらかじめ準備した想定問答集の中に、すでに解答があった。晴信はそのすべてを暗記している。

「さらに北へ進んで、越後へ。あたしは海が欲しい。甲斐も信濃も山国。塩と、貿易のための港とを、どうしても確保したい」

この発言がのちに武田家の、晴信と長尾景虎の運命を大きく変えることになるのだが、今はまだ晴信も勘助も北条氏康も、そのことに気づいてはいない。この時まだ、景虎は越後の守護代ですらないのだ。越後に不敗無敵の軍神・^{ながお}長尾^{かげとら}景虎が、のちの上杉^{けんしん}謙信がまもなく現れることなど、誰にも予想できることではなかった。

北条氏康。あたしと年は変わらないのに、まるで氷のような心の持ち主。人の心の奥底を平然と覗き込んでくる恐ろしい女。でもこれで乗り切れた、三国同盟の布石は成った、北条も今川も今後は甲斐に攻め入ってはこない。あたしは両家に対等の格を認められ、そして信濃攻略もやっと軌道に乗った——晴信が安堵のため息をつこうとした時、氏康が不意を突いた。

「越後の海？ それは甲斐にとって必要なものを奪うというだけの話よ。あなた自身の野望の終わりではないわ。武田晴信。あなたのほんとうの夢はなに？ それを教えてくれれば、あなたを信じるわ」

勘助が「あいや。それは」と顔色を変えて氏康を制止しようとしたが、晴信は逃げなかった。

氏康の細い目をにらみつけながら、胸を張って、言った。

「氏康。あたしは、あたしの父上がやったことの逆をやる。この武田晴信が臆病者ではないことを天下に証明する。いずれは、甲州軍を日ノ本最強の軍

団に育て上げる。武田晴信は、古今無双の名将、戦国最強の武将となる」

想定問答集にはそのような言葉はなかった、と勘助は隻眼を見開いて震えていた。

「つまり駿河に追放した父親に認められたい、それがあなたの夢なのね。武田晴信。そのためならば、果てしない戦いの日々を突き進む覚悟があるというのね」

「そうだ氏康。そのためならば、必要があれば今川とも北条とも一戦を交えることをあたしは厭いとわない。しかし今のところ関東も都も、あたしの眼中にはない。お前たちにくれてやる。甲斐はまだ弱小国だからな。だが、日ノ本最強はあくまでもこの武田だ。今は弱くとも、あたしは必ずこの国の歴史になかった最強の軍団を編成してみせる」

「武田家の志をあなたは継がないのね。それでは、あなたの野望には歯止めがない。終わりがなくなる。誰も、ここで終わりだ、もう十分だ、よくやった、と止めてくれない。せっかく美しく高貴な姫の身に生まれながら、生涯を合戦に費やしてしまうつもり？ 悲しい女だわ、あなたって」

「違うな。父上に志と言えるものはなかった。武田家を守るため、生き延びるためにがむしゃらに戦ってきただけだ。甲斐を統一するところで父上の役割は終わった。その先の展望を、父上は持っていなかった。そのような余裕もなかった。だから目先の平和のために諏訪と同盟などしたのだ。氏康、お前とあたしとは違う。父親に甘やかされてきた分、お前は甘い」

「どうかしら。それは、戦ってみなければわからないわ。小田原城は誰にも落とせないわ」

「ふん。最初からあたしと戦うつもりがないのだろう。甲斐のような貧しい国など奪っても、北条にはなんの利益もないからな」

氏康が、はじめて笑った。唇の端をわずかに吊り上げるだけの、酷薄な笑顔だった。

「その通りよ。武田晴信。あなたの胸に秘めた志を、たしかに聞いたわ。あなたはまるで、生まれてから一度たりとも餌にありついたことのない飢えた

虎だわ。同盟相手として信用すべき女ではないけれど、利で結びついている限りは信頼できるわ」

北条氏康が、武田晴信を自分と対等の戦国大名として認めた、ということだった。

緊張の糸が切れたかのように、勘助が震えながら安堵のため息をついた。

世の中には恐ろしい娘がいるものだ……よくぞ御屋形さまは正面から乗り切られた、と若く美しい両雄を見つめながら。

「あらあらまあまあ。わらわにはぴんと来ませんでしたでしたが、どうやら今ここに女と女の友情が生まれたらしいですわね。^{あつぱ}天晴れですわ、晴信さん。褒美に、花丸の扇子を贈ってさしあげますわ」

勘助以上に緊張し消耗していた晴信が、うっとうしそうに義元が頭の上に掲げてきた扇を手で振り払った。

「……いない」

「晴信さん？ 父親に認められたいというけなげなあなたの心、しかと受け止めましたわ。わらわのことも、これからは義元と呼び捨てにしていいますわよ」

「……お前と友達になるつもりはない」

「どうしてですか？ 氏康さんとはお友達になったのに？ わらわだけのけ者ですか？ もしかして、わらわの高貴な血筋故に？ 遠慮はいりませんのよ。あなたが甲斐の山猿であろうとも、差別などしませんわよ？ そもそもこのわらわと釣り合う血筋を持つ姫武将など、足利將軍家にしかおりませんものね！ おーっほっほっほ！」

「雪斎どの。あたしはとても疲れている。義元を静かにさせてくれ。耳が痛い」

「いえ晴信どの。わが姫は心のままに自由に言葉を連ねるお方。好きに語らせていただきます」

理詰めで生きている氏康よりも、なにも考えずに心の赴くまま好き勝手に振る舞っている義元のほうが厄介な相手かもしれない、と晴信は思った。

案外、義元はあっさり上洛に成功して易々^{やすやす}と天下人になってしまうかもしれない、とも。

それはそれで構わないかもしれない、とも。

天下を、晴信は夢見ている。しかし今日、氏康との対決の際に、晴信は自分が抱いていた真の志を知った。最強の武将、最強の軍団——むろん「天下人」になることこそが最強を知らしめるもっとも有効な道であることに違いはない。だが、自分のほんとうの志は、天下人という結果ではなく、最強という存在そのもの、最強を目指す過程そのものにある——。

信虎を追放するという晴信の選択が間違いであったと、父・信虎に感じさせてはならなかった。正解であった、と認めてもらいたかった。認めさせねばならなかった。そのためには、ただ上洛するだけでは足りないのだ。問答無用の、天下無双の武田甲州軍団を率いる日ノ本最強の名将に自らを成長させなければならないのだ。

祖父と父に愛されて家督を継ぎその志をも継いだ氏康とは、そもそもの出発点が違う。

だがしかし、義元は父親に放置されて幼い頃からずっと寺に預けられていたはずだが、不思議と義元の心の中にはその生い立ちのために欠落したものがまったくないらしい。そこも、義元が持つ得体の知れない徳のような気がした。それは自分にはないものだとも。

隣で、勘助が（御屋形さまの野望は果てしがなく巨大で、器には収まらぬのです。それでよいのです。この勘助が軍師として、天下という結果へ御屋形さまを導きます。そのための策は、すでに練っております）とうなずいている。

「今川義元、河東の地を返還してあげるわ。北条の敵は関東管領上杉家。二度と駿河には兵を入れない。だから、武田晴信が、この甲斐の虎が成長して戦国最強の軍団を編成してしまう前に、さっさと上洛しなさい——さもなければあなた、駿河でぐずぐずしていると業を煮やした晴信に滅ぼされるわよ」

氏康が、静かに席を立った。

ちりん、と氏康の首にかけられている金色の鈴が、鳴った。

「氏康どの、その鈴は？」

勘助が問うた。

「場合によっては風魔に命じて皆暗殺させるつもりだったけれど、気が変わったの。あなたたちを生かしておいたほうがはるかに北条の利になる」

「あいや氏康どの。わが武田もこの寺の周囲に、真田の乱破^{らつぱ}を忍ばせております。それは不可能だったかと」

「そのようね。真田の庄には、風魔とはまた別系統の異形の忍びがいると聞くわ」

「御意」

「その点、今川の忍びは少し甘い。ただの人間どもみたいね。雪斎、お上品なあなたらしいけれど注意したほうがいいわよ。この世界には、人間の世界の常識でははかれない異形の力を持つ者がいる。彼らは決して歴史の表舞台には立とうとしないけれど、神秘は確実に存在する。あるいはまた、この世界の『^{かなた}彼方』から来る者も、いるかもしれないわ——」

「ほう。冷めた氏康どのとも思えぬ、意外なお言葉。この世界の彼方から来る者。そのような者が実在すれば、それはまるで神ではありませぬか」

「幼い頃から周囲に風魔の者どもを侍^{はべ}らせていれば、誰だってそう思うようになるわよ。私は、現実^{まみ}に存在する者はどれほど不合理であっても否定しないの。これほど世俗に塗れて汚れた世界にもまだ、神秘が満ちている」

拙僧は信仰の場ではともかく、戦場では神秘も異形の力も信じませぬ。幻庵のおばばさまはまさしく異形の者だとは存じますが、と雪斎は苦笑していた。

「にゃんと。おばばのどこが異形なのじゃーっ！」

今川と北条の和議は、成立した——。

北条氏康が義妹・綱成を救出するために、河越城の周囲を埋め尽くした八万の関東管領軍に、わずか八千の手勢を率いて乾坤一擲^{けんこんいつてき}の奇襲を敢行^{せん}し殲滅^{めつ}したのは、これからまもなくのことだった。

氷のように冷たい心を持つとうそぶく氏康だったが、幼い頃からともに過ごしてきた義妹・綱成に対してだけは、別だったのだ。

しかし、三者会談はこれで終わったが、この後に想定外のことがあった。
北条氏康が、河越城の救援に急ぎ出立したあと――

すっかり帰り支度をはじめていた今川義元の隣で、太原雪斎が、晴信に「客人をお招きしております。どうしても晴信どのに会わせろと聞かぬ故」と耳打ちした。

勘助は雪斎に「こちらで茶を」と遮られて通されず、晴信だけがその客人の待ち受ける茶室へと入った。

晴信を待っていた客人とは――。

「勝千代。いや晴信。そなたの話、襖越^{ふすま}しに聞かせてもろうたぞ。このわしの為したことの事ごとく逆を行くと言うたな。ならばそなたは、いずれ駿河今川家との同盟も破り、定をも踏みつけにするつもりなのであろう」

「……父上!？」

晴信が駿河の今川家のもとへ追放した、実父・武田信虎だった。

戦場で鍛え上げられた肉体の持ち主。

虎狼のような瞳は、娘の晴信によく似ていた。

「座れ。雪斎に、刀を取り上げられておる。それでもなお、わしを恐れるか。そなたはまことの臆病者よ」

「恐れるなど。あたしは、甲斐の当主です」

晴信は、信虎の正面にあぐらをかいて座った。

もしも信虎の動きに不審なところがあれば、即座に父であろうが抜き打ちする覚悟だった。

「すでにわしは隠居させられた身。雪斎にも止められたが、どうしてもそなたに一言言わねばならぬのでな。諏訪頼重のことよ。諏訪との同盟を反故に

するのも諏訪を併呑するのもそなたの勝手。しかし、うぬは諏訪に嫁がせた禰々を犠牲にしたのじゃ。晴信。うぬの諏訪での勝利は、禰々を踏みつけにした結果ぞ。うぬは……武田の一門を裏切ったのだ！」

「諏訪を取らねば、信濃平定は不可能です」

「武田の掟を忘れたのか、この臆病者！」

「武田家百年のことを考えればこそその諏訪攻めです。甲斐に巣ごもっていれば、いずれ巨大化した天下人勢力に武田は滅ぼされます」

「理屈じゃ。武田が駿河、北条と手を組めば、いずれは今川義元が上洛して天下人になってしまうではないか！」

「父上。雪斎どのに聞かれます」

「この隠居との会話を雪斎に聞かれようと聞かれまいと、雪斎はうぬの野望の激しさをすでに知っておるわ！ 野望なき娘が、父親を隣国へ追放などするまいぞ！」

「……」

「海を持たぬ甲斐と駿河では国力も地の利も違いすぎる。差が大きすぎる。故にわしは駿河と結んだのよ」

「地の利のなさは、武田が誇る人の和によって補えまする」

「うぬが信濃平定に躍起になっているうちに、太原雪斎は堂々の上洛戦を興すぞ！ その時、うぬは禰々に続いて定まで泣かせるか。二人の妹を裏切るか？」

晴信は、信虎の視線を受け止めながら、うなずいた。

「……必要とあらば」

「晴信！ そなたのその際限のない野望が、武田一族ことごとくをついには滅ぼす結果となるであろう！ そなたは己の足下に広がる大地を見ていない。武家にとって大切なもの、守るべきものは一族の血と、そして祖先伝来の土地じゃ。そなたが追い求めている日ノ本最強の名将などは、そなたの頭がこしらえた観念にすぎぬ！ 一足飛びにそのような途方もないものを欲するのは、そなたが臆病であるためぞ！」

「臆病のなにがいけないのですか父上。臆病こそ、用心深さと周到さの源泉。あたしは父上のような油断はしません。甲斐の国を富ませ、最強不敗の軍団を育成し、必ずや今川を出し抜きます。戦国日ノ本最強の武将は武田晴信。未来永劫、この国の民にそう語らせます」

雪斎に不意打ちを食らったにも拘わらず、晴信は激高する信虎の前でも堂々と己の意見を述べた。

勘助と出会い、家督を奪うと決断した瞬間から、晴信の中でなにかが大きく変わった——それはあるいは武将としての成長とも言えるし、あるいは己の野望の虜となっていたとも言える。その激しい野望は、紛れもなく乱世の猛将でありかつ策謀家であった父・信虎から継承したものだ。

これがあのわしの^{どうかっ}恫喝にいちいち怯えていた娘か。まるで見違えるようになった、若き虎じゃ、と信虎は目を細めたくなくなった。

だが、あやうい。しょせんは学問と書物の世界で頭をこしらえた娘よ、まことの合戦の修羅場を晴信はまだ知らないのじゃ、と思い直した。

「晴信。わしは、そのような頭でこしらえたものなど決して認めぬぞ！ わしが求めるものは現実じゃ、結果じゃ！」

「承知。むろん結果を出さねば、人々はあたしを最強とは認めますまい」

「晴信！ 日ノ本最強を名乗るのであれば、必ずや勢田に武田菱の旗を立てよ！ 今川に後れを取るでないぞ！ よいな！」

晴信は、ぴくりと肩を震わせた。

信虎との不意打ちの対面において、はじめて、大きく心が揺らいだ。

これまで信虎から「武田の当主としてなにごとかをなせ」と命じられた経験が、晴信には、なかったのだ。

「……それで、あたしを認めてくださいますか。父上」

かろうじて、その言葉は、声になった。

「そなたがどれほどの臆病者であろうとも、すべては結果じゃ。まこと上洛を果たせば、武田家中興の英雄と認めざるを得まい」

「それでは、承りました」

「この父に誓えるか！」

「誓いましょう」

「頭の中ではなんとでもなるわ。しかしまこと修羅の日々に耐えられるのか、そちのような文弱の徒が？」

「すでにその覚悟です。そうでなければ、禰々に犠牲を強いたりはできません」

晴信は、胸を張った。

今にも晴信に飛びかかりそうな勢いで怒鳴り続けていた信虎だったが、晴信がまなじりを吊り上げていささかもひるまぬ姿を見た、信虎のほうに疲れ果てたように肩を落とした。

「痴れ者めが」

茶を点てながら、信虎はつぶやいていた。

その仕草が、どこか、老いていた。

晴信は胸を突かれそうになった。

「なぜ、駿河で悠々自適の平穏な日々を過ごさぬ。なぜ修羅場へと向かう……なにが、そなたをかき立てるのじゃ」

「父上から受け継いだ、血でありましょう」

信虎はそれ以上口を開かなかった——雪斎の耳に入れてはならぬ言葉を、彼は晴信にかけてやりたかったのだ。

(晴信。雪斎はもう死んでもおかしくない歳じゃ。それにひきかえ、そなたは眩しいほどに若い。やれ。今川を出し抜け。京に風林火山の旗を立てよ。わしはこれより、陰からそなたを支援しよう)

その思いが、晴信に伝わったか、どうか。

信虎も晴信も、どうしてもお互いに、素直になれなかった。

言えば晴信が甘えるかもしれぬ、黙っていたほうがよい、と信虎は思った。

晴信は、信虎の口から罵倒以外のなにごとかの言葉を期待して待ち続けていたが、お互いに無言のまま時が流れた。

「上洛を果たすまで、二度と会いますまい。さらばです、父上」

晴信は「父上、おさらばです」と静かに頭を下げ、部屋を出た――。

親子はこの時、甲斐で悲劇の種が蒔かれていることを知らなかった。